

一人で背負わせない。地域で育て、3年後の出口と一緒に
つくる。



地域おこし協力隊として農業に挑戦したい。

そう思ったとき、多くの方が不安に感じるのは、「本当に続けていけるのか」ということではないでしょうか。誰が教えてくれるのか。どこで学ぶのか。農業で生活していくことはできるのか。3年後にどんな道があるのか。

山辺町では、協力隊を単なる労働力として迎えるのではなく、受入農家、町役場、伴走支援業者（㈱ローカル・インキュベート）が一緒になって、3年間の活動と任期後の出口を見据えた受入体制づくりを進めています。

山辺町の農業には、さくらんぼ、りんご、ラ・フランスなどの果樹を中心に、高品質・高単価で価値をつくってきた蓄積があります。一方で、高齢化や園地継承、販売力の更新、気候リスクなど、向き合うべき課題もあります。

だからこそ、山辺町では「人を呼んで終わり」にしません。地域側も問いを持ち、受入農家も一緒に考え、協力隊本人が一人で背負い込まない形で、山辺町の農業の次の可能性を探していきます。



1. 人を呼ぶ前に、地域側が準備しています

農業分野の協力隊募集では、「来てくれたら何とかなる」という受入ではうまくいきません。特に果樹農業は、技術習得に時間がかかり、収益化までの期間も長く、天候や販売先にも左右される仕事です。

そのため山辺町では、募集前の段階から、地域課題、求める人物像、任期中の活動イメージ、任期後の出口を整理しています。誰が師匠になるのか。どの園地や農家で学ぶのか。作物をどう組み合わせれば暮らしにつながるのか。販売や発信をどう伸ばしていくのか。そうした問いを、町役場だけでなく、受入農家や伴走支援業者と一緒に検討しています。

協力隊を受け入れることは、地域側にとっても、自分たちの農業を見つめ直す機会です。山辺町が目指しているのは、協力隊本人だけに努力を求める受入ではなく、地域側も「育てる力」を持つ受入体制であり運命共同体です。

2. 現役農家の声から見えてきた、山辺町農業のリアル

—
受入農家へヒアリングをしたところ、山辺町の農業は、高品質・高単価を志向してきた一方で、果樹園地の継承が大きな課題になっていることが確認されました。果樹は一度木を倒すと、再び収穫できるまでに長い時間がかかります。そのため、辞めたい農家や縮小したい農家の情報を早めに把握し、次の担い手へつなぐ仕組みが必要です。

また、山辺町の農業は、他の大規模産地と同じように面積や数量で競うことよりも、品質、作り手の物語、地域性、顧客との関係性を活かして価値を高めていく方向性になっています。だからこそ、これからの担い手には、農作業だけでなく、販売、情報発信、顧客づくり、商品づくりに関わる視点も必要になります。

一方で、そうした力を最初からすべて持っている人を求めると、応募できる人は限られてしまいます。山辺町では、着任時点の完成度ではなく、地域で学ぶ姿勢と、任期中に成長していく可能性を大切にします。



3. 最初から一人の農家・一つの品目に固定しません

受入体制の特徴の一つは、1年目から特定の農家や品目に早く固定しすぎないことです。まずは複数の農家で研修し、さくらんぼ、りんご、ラ・フランス、露地野菜などの現場を経験しながら、山辺町の農業全体を理解していきます。

これは、協力隊本人にとっては、自分がどの作物や働き方に向いているのかを見極める期間です。同時に、地域側にとっても、その人の性格、体力、学び方、コミュニケーションの取り方、農家との相性を見極める期間になります。

園地継承や技術継承は、信頼関係があって初めて進みます。だからこそ、いきなり園地を渡すのではなく、複数の現場で学び、少しずつ信頼を積み重ねながら、2年目以降に具体的な方向性を検討していく設計を大切にしています。



4.3 年間で段階的に設計します

1年目は、地域理解、農業現場理解、信頼関係づくりの期間です。複数農家での研修・作業補助、町のイベントや農産物PR、情報発信などに関わりながら、山辺町の農業と地域の人間関係を広く知っていきます。

2年目は、品目や経営方向性を仮決定し、小さく実践する期間です。例えば、果樹で進む場合は、継承可能な園地や受入農家との接続を具体化します。また、露地野菜や小規模作物を組み合わせる場合は、栽培や販売の小規模実証に取り組みます。SNS発信、イベント販売、顧客づくりなど、農業を「届ける」経験も積んでいきます。

3年目は、就農・継承・事業化に向けた準備期間です。農地や園地、機械、資材、資金計画、販売計画、顧客づくりを具体化します。本人の適性によっては、自ら農業経営を行うだけでなく、農産物の販売支援、情報発信、農家のプロデュース、地域農業のサポート役として残る可能性も検討します。



5. 活動を本人任せにしないための伴走体制があります

協力隊制度は、活動範囲や期待値が曖昧になりやすい制度でもあります。だからこそ、山辺町では、協力隊本人、受入農家、町役場、伴走支援業者が定期的に状況を確認し、認識のずれを早めに解消することを大切にします。

着任後は、活動計画、月次報告、定期面談、成果確認を通じて、日々の活動を整理します。週の大半を農家での研修・作業補助に充てつつ、一定日数を町への報告、情報発信、地域活動、活動整理、面談などに使うイメージです。農繁期・農閑期によって活動量や内容は変わるため、年間計画と月次計画をもとに、受入農家・町役場・伴走支援業者で調整します。

協力隊本人に過度な期待を背負わせるのではなく、**地域全体で育て、任期後の出口を一緒につくること**。それが、山辺町の受入体制の基本です。



6. 任期後の出口は、複数の可能性から一緒に考えます

任期終了後の出口は、独立就農だけに限定しません。協力隊制度の実態を踏まえると、着任時点から3年後の独立就農を確約することは現実的ではありません。だからこそ、**最初から一つの出口に固定せず、3年間を通じて本人の適性と地域側の受入可能性を見極めていきます**。

想定される出口は、第一に、既存農家の園地や技術を段階的に引き継ぐ**事業承継型就農**です。第二に、町内農家や農業法人での**雇用就農**です。第三に、露地野菜や小規模作物から始める**小規模就農**です。第四に、農産物の販売支援、情報発信、農家のプロデュースなどを担う**農業関連人材**としての定着です。

山辺町で大切にしたいのは、「採用できたかどうか」だけではありません。協力隊本人が地域で自分の進路を見つけ、地域側も次の担い手を受け入れ、育て、定着につなげる力を持てたかどうか。そのプロセス自体が、山辺町農業の未来づくりにつながります。

7. ローカル・インキュベートも、地域と応募者の間に立って伴走します

ローカル・インキュベートとは、山辺町から委託を受け、地域おこし協力隊の伴走支援をする業者になります。説明会の企画、応募希望者との面談までを一体的に支援します。

応募前の段階から、応募者の不安や関心を聞き取り、地域側の期待とすり合わせることで、着任後のミスマッチを減らします。また、着任後も必要に応じて、活動整理、目標設定、地域プレイヤーとの接続、販売や発信のブラッシュアップ、任期後の出口づくりを支援します。

山辺町の協力隊は、一人で地域に飛び込む募集ではありません。受入農家、町役場、支援業者がチームとなり、本人と一緒に3年間を設計していく募集です。



8. まずは、話を聞くところから

—

山辺町の農業分野の協力隊募集は、すでに完成された就農モデルに乗る形態ではありません。受入農家、町役場、伴走支援業者と一緒に、山辺町で続いていく農業の形を考え、つくっていく新たなスタイルです。

少し興味がある。自分に合うか不安。現地の雰囲気を知りたい。農業のリアルを知りたい。3年後の可能性について相談したい。そんな方も歓迎です。無理に応募をすすめることはありませんので、**まずは気軽に話し**できれば嬉しいです。

オンライン面談はこちら

<https://forms.gle/XqQwwAeEVBy1SQm59>

- ・山辺町での活動内容や実際の暮らし、農業分野の協力隊としてのリアルな働き方についてご説明します。